

## ■ 研究会開催にあたり

2020年から毎年12月に「ジェンダー平等の教育」を考える総研が連続して持たれている。今年度は明治大学情報コミュニケーション学部の田中洋美准教授の講演を柱にオンラインで行った。寺尾議長「12月1日世界エイズデー、12月3日障害者の日、4日から人権週間。この間も戦争が続き、人権が蹂躪されており、常に子どもや女性が犠牲になっている。日本はジェンダーギャップ指数も低く人間が貶められる現実があり、新自由主義が進み、格差が固定され、関係性の構築が難しくなっている。他者を尊重しない危機的な状況だが、真実を見極め、民主社会を構築することが重要。充実した会にしたい。」という挨拶のあと、中村万里菜研究会長から「高校生の時からFacebookを使い始め、現在に至るまでほぼ毎日SNSを使っている。友人との連絡を取ることや情報を得るのに有用だが、他者や自分のことをどうとらえるかという認知の部分に課題があると感じる。また若者の自己肯定感の低さにも関連があるのでは？という問題意識がある。総務省の調査によると日本人の若い世代の7割が自分の容姿にネガティブな印象を持っている。SNSに影響を受け、見た目のコンプレックスなどが過度なダイエットやメンタル面の不健康な状態に繋がっているのではないか。」という問題提起が行われた。

## ■ 講演「ジェンダーの視点から考えるデジタルテクノロジー」

続いて行われた田中洋美先生の講演の演題は「ジェンダーの視点から考えるデジタルテクノロジー」。田中先生はジェンダーとメディア、AI、デジタルテクノロジーについて研究をされていて、これまでは主に大学生を研究対象としてきたが、デジタルテクノロジーの利用者層の低年齢化により、研究対象を広げたいと考えていらっしゃったとのこと。田中先生ご自身は2007年にネット関係で「炎上」という言葉が広がったのをきっかけに、メディアを研究し始めたそう。2010年前後からSNSなどの新たなメディア・プラットフォームが普及し、ビッグデータ、AIといった技術が注目を浴びるようになり、私たちの生活は便利になった反面、様々な社会問題も生じている。SNS関係では、2016年「保育園落ちた日本死ね」2017年「インスタ映え」「フェイクニュース」と言った言葉が話題になり、2018年には「#MeToo」という連帯できる新しい形の社会運動が生まれた。この間、SNSの利用率は2011年が14.6%、2016年56.8%、2020年73.8%と急上昇したそうで、こんなに急激に技術が広まるのはあまりないこととお話に、改めて愕然とした。

### SNSは必要不可欠な存在だが…

SNSは、今や多くの人にとって必要不可欠な存在になっている。SNS上でのいじめも後を絶たない。どう使ったらいいか、どう伝えたらいいか—子どもにも大人にもノウハウがなく、準備ができないまま技術が広がってしまっている。SNSは生活のインフラとも言えるが、そんなインフラの持ち主は

海外の企業だという現状でいいのかという問いかけに考えさせられた。先日オーストラリアでは16歳以下のSNS利用を禁止する法律が制定されるなど、海外の動きも視野に入れつつ真剣に考える必要がありそうだ。

### ジェンダーの視点から

続いて、ジェンダーの視点についての話題に。「性」に基づく不均衡な社会関係（権力関係）についての分析では、必ずしも女性だけに焦点を当てるのではなく「白人、中流階級、異性愛者、健常者の男性」が「主流」とされる社会の中で、性と様々な差異（階級、人権、民族、障がい等）は交差して考えられるという視座が与えられた。その中で興味深かったのが、「人間」という概念の見直し。AI、ロボット、機械と共存する社会の中でそもそも誰が「人間」と見なされてきたのか、「人間」とは何なのかという根源的な問いが生まれてくる。英語の man（男性）、フランス語の homme（男性）という単語は「人間」も意味するが、そこには woman、femme が含まれていない。しかし歴史を紐解くと「人間」をめぐる排除／包摂は支配や抑圧、暴力を生み出してきた。そうではない世界を構想するために、ジェンダー研究が貢献しているというお話に思わず膝を打った。

### ソーシャルメディアとジェンダーを考える4つの視点

田中先生のお話ではソーシャルメディア（S o M e）とジェンダーを考える際には4つのポイントがあるそうだ。すなわち「①性差がみられる」「②功罪あり」「③ジェンダーと関連して発生」「④メディアリテラシー？」。①については、同じようにソーシャルメディアを使っているつもりでも、女性ユーザーが多いプラットフォーム（Instagram等）では自撮りや外見に関するテーマなどで女性が被害に遭いやすいとのこと。過度なダイエットから摂食障害に繋がったり、インスタが始まった翌年から若者のうつが増えたりしたという事例もある。②については、情報にアクセスでき、手軽にコンテンツを作成・発信することで新たな繋がりや世論が生まれ、女性やマイノリティをエンパワーメントできる反面、オンラインストーキング、セクスティング（性的なメッセージや写真を送る行為）やセクストーション（性的脅迫）の被害や加害も後を絶たない。また③については、元々社会の中にあったジェンダーの問題が解決されないまま、ソーシャルメディアが普及してしまっている側面があるということ。ある意味では従来の問題、例えば女性身体モノ化、ルッキズムや性役割の強化などが一部形を変えながらネット上で拡大再生産されているとも言える。④のメディアリテラシーについては、従来のマスメディアだけでなくソーシャルメディアを含める形で更新しなければならないとも。ソーシャルメディアは種類や作り手、内容が多様化しており、感情に働きかけ、依存させるよう設計されている。簡単なことではないが、急激なデジタル技術の進歩で私たちの脳の働きすら変わっているともいわれる現状の中で、ソーシャルメディアと自分の関係について考え、批判的自律性、自分で判断できることの必要性を痛感した。

### 人工知能（AI）とジェンダー

昨今、急速に身近になりつつある人工知能（AI）の問題についても興味深いお話を聴くことができた。ここにも4つのポイント「①性的偏見・差別の（再）生産」「②差別する主体＝人間＋機械」「③AIが性的害悪を助長」「④機械の擬人化＝ジェンダー化」があるとのこと。アルゴリズムによる性差別や人種差別助長の問題も根深い。女性や有色の人々が検索機能の特定の職業から排除されていたり、女性蔑視的な考えがビッグデータに反映され、ヘイトの助長に繋がったりという事例があるそうだ。またプライバシーや肖像権の侵害、フェイクポルノの生成も大きな問題だ。そのほか、日本では機械がアンド

ロイドやキャラクターのように具体化されることが多く、女性性を付与されることが多いというのは確かにその通り。Chatbot やスマートアシスタントに女性の名前がつけられたり、女性として設計されたりする一言い換えると人間＝男性／ロボット＝女性という関係性—設計段階からの問題が実装されることで人々の意識にさらに強力な刷り込みが行われてしまうという危惧がある。また AI とジェンダーに関わる問題について、日本の場合は独自のメディア文化（アニメ、アイドル、女子アナ、グラビアなど）の影響があること、日本政府が AI 分野では主に産業・経済、少子高齢化、医療に言及しているが、文化への関心は希薄であることも田中先生は指摘されていた。

最後に AI とジェンダーに関して、①異なる立場の人々や組織間の対話、②学校・教育の役割、③その他のアクターの役割（学卒後、様々な研修やリスキリングなどの機会提供）、④メディアやジャーナリズムの役割が重要であるという提言で締めくくられた。

### 講演をめぐる質疑・討論

続いて行われた質疑応答では「掃除をするのが女性というより、嫌悪感を抱かずに広く受け入れやすいのは女性をベースにしたものなのではないか？」という質問に対して、田中先生からは「ロボットのジェンダー化については、そもそも擬人化する必要がなかったり、女性にする必要がなかったりするところで女性化されている。ステレオタイプに切り込むことも必要では？ ただし、設計する側、デザイナーにそもそも女性がいらない。プログラマーは I L O によると女性は 5 %。工学分野にジェンダーの授業があるか？ 作る側が社会について学ぶことでだいぶ変わってくるのではないかと考えている。東京科学大学修士課程には Chatbot に付与された性別について研究している人もいる。必要ないときにはジェンダーは付与しなくていいのではと思っています。」という回答をいただいた。また「AI ロボットに女性性が付与されやすいのは、やはり開発者に男性が多いからでここもジェンダーの問題だろうなと感じた。」という感想に対して田中先生は「開発者は実質的にほとんど男性。ロボットは人間に仕えるもの。誰かに仕えたり、サービスを提供したりするというのは労働の歴史を見てもほとんど女性。狩猟採集民族の社会では性別分業ではなくて年功序列で、男性も女性も一緒に狩りをしていたという研究もある。資本主義では女性がサポートする役割を担いがち。人間が受け入れやすくするにはどうしたらいいかという研究をしている人たちもいる。性別役割を受け入れた形の方が受け入れやすいという結果が出ているが、差別・偏見を助長するような形で何かものを作ったりすることに賛成するのかという問題。いくら便利でも、物が売れても、それでいいのか？ ジェンダー研究者も男性がたくさんいる。どちらが差別されているという問題ではない。それで嫌な気持ちになってしまう男性や女性がいるということは、それだけその人のジェンダーアイデンティティが強いということ。それだけ性別アイデンティティが社会の中で強いということかもしれない。Siri はもともと女性的な声だったが、今は選べるようになっている。ニュートラルなものを増やすというよりはバリエーションを増やして対応している。すべて取っ払ってみるのもいいかもしれない。」とおっしゃった。開発者側の問題もあるが、私たちが無自覚に無批判に受け入れてしまっているという問題もかなり根深いことを思い知らされた。

### ■ 現場からの報告

田中先生の講演の後は現場からの生徒指導の具体的な事例をお聞きした。児童ポルノに関わる問題で、発覚まで時間がかかったことで、関わる人間が多くなったこと、外部の協力も得ながら、しかし、学校が中心となって指導を行ったことを報告いただいた。SNS 上でグループができたり、匿名で相手がわからないままやり取りが行われていたりする。3 人・雰囲気が発信し、周囲にうけるからと自分で

もやってしまう。何が正しくて、何がいけないのかわかっていない。言葉が軽く、本人は冗談のつもりで「死ね、うざい、きもい、ボコボコにするぞ、殺すぞ」というようなことを発信したことによるトラブルがあることもお聞きした。

報告に対して「なぜ性的な画像などを送ってしまうのか？」という質問が出された。それに対して「最初からではなくやりとりをする中で、興味があるからと画像を求める。身近にいる女の子の…という方が男子の興味を抱きやすいようだ。女子の方は仲良くなりたい気持ちもあって送ってしまうのでは？ ほしいという子がいるからあげてしまう。深く考えていない印象がある。」というリアルな生徒の様子が伝えられた。田中先生からは「なぜ送ってしまうのか、もらおうと思うのか。イギリスの中等教育の学校での調査ではジェンダーと関係がある。送る子の理由、送らない理由。コミュニティの中で無下に断ると自分の立場が悪くなる、気に入られたい、受け入れられたい。送らないとしても無下に断るということはしていない。後でね、今度ね…という感じ。また男の子の側からすると、生身の人間の身体というよりは物としてのコレクション。身近な、知っている人の画像の方がほしいと思う。集めて、見せ合いっこする。マスキュリティの中でのマウンティング。あいつ、すげーと認められたい。仲間内のピアプレッシャーもある。日本ではそういう研究はないが、同じようなことが起きている。当事者の中でどういう形で起きているのかは明確にはわからない、複雑な状況なのではないか。」との指摘があった。

## ■全体討論

最後に全体を通して、参加者からは『『ジェンダー化された差異』を当たり前になしている開発者がジェンダー付与をしてしまうという点、しっくりきた。ジェンダー化された差異に当たり前のように繰り返しふれることで、どんどん内面化してしまうという怖さがあると思う。」「デート DV 防止教育の中でジェンダー規範と戦っている気がしている。ジェンダー規範を持つ人たちが開発しているところから、やってもやっても追いつかないのが腑に落ちた。生徒たちは何も考えずに生きていて、流されやすい。自分を持って、人権意識を持って使わせないといけない。Siri の声は女性なのはなぜ？ ぼーっと生きてるとそういうことに丸め込まれてしまう。」「学校現場でやらなければならないことはたくさんある。アイデアもいただき、元気も出た。」という感想が出た。また「教育現場で自分を見直したり、ソーシャルメディアと自分との関係について考えたりするワークなどについてのアイデアを知りたい」という要望に対して、田中先生からは「コミュニティガイドラインをプラットフォーム側が最近を用意している。日本語でのコミュニティガイドラインをみんなで読んでみて、問題のあるコンテンツを投稿していないか確認するのもいいかも。TikTok のアドバイスをしたことがある。シンガポールの説明責任センターに行った際はコンテンツをチェックして、飲酒・タバコ・動物虐待・性的なものなどガイドラインに合わないものを削除する仕事に TikTok だけで4 万人が従事していた。自分が今気になっているコンテンツを持ちより、なぜ、どうして気になったのかをざっくばらんに話すところから始めるのもいいかもしれない。またソーシャルメディアで夢・憧れに着目して、実際の生活と自分との距離を確認させることもできるかもしれない。マスメディアの時代は、有名人と普通の人の距離がもっとあったが、ソーシャルメディアの時代は距離が近い。同じようにはなれないということを知っておくのもいいかも。気づくきっかけになるのでは。ジェンダー規範はガチガチで社会のいろんなところにあるが、希望を捨てずにやっていくのが大切。ダメダメというのではない対話の方法があるといいのかもしれない」と具体的なアドバイスをいただいた。

時間があっという間に感じられる充実した総研であった。普段の生活の中で無自覚に見過ごしていた

ことに目を開かれ、一步踏み出してみようと背中を押された気がしている。

## ■ 参加者の感想

◆生徒を被害者にさせない、加害者にさせない。私たち教員に何ができるか難しいです。SNSの利用の方法や、見えないところにあるジェンダーを生徒と話しながら、考えていきたいと思いました。◆ついつい批判的に聴いちゃうので、必ずしもすべてに納得したわけではありませんが、参考になることも多くありました。◆IT情報関係の開発者がジェンダー規範バリバリの方（おそらく男性）の影響で、子どもたちがどっぷりつかっているスマホ（iPhone）のSiriはじめ、音声案内の女性の声、ロボットの形や音声を女性型にしてしまっていることが、世の中に「人に仕える役割は女性である」と布教してしまっているんだということを認識できたことが一番の収穫でした。こんなにあなたたちはまみれてしまっているの、自分をちゃんと持って人権意識も持って「はて？何かおかしいぞ？」と疑問を持つようになりなさい、と伝えていきたいです。◆日本ではユーチューバーやゲーム制作者などキラキラして見える職業が小学生の憧れの職業となっているが、実際は従来の非正規労働が形を変えて再生産されているということに気づかされました。同じように児童がSNSに触れる機会が多いアメリカは堅実な職業を挙げることが多いとのことでしたが、なぜこのように違いがみられるのかも興味があります。◆日本はまだまだジェンダー規範が抜けていないことも改めて感じました。私の場合は特に夫に感じるところですが、男子の家庭科教育がされていなかった年代層には特にそう感じます。そうした年代層が商品を生み出すときは、自然とジェンダー規範が取り入れられてしまうのかもしれないことにも気づきました。◆あっという間に時間が過ぎてしまい、まだまだ聴きたい、伺いたいことが、、でした。

今を生きる人たちが、今後の社会創造に向け様々な視点から課題を共有し、広め、深め、行動に移していけると嬉しいです。◆SNSと学校、感染症とリモート教育など総括・改善・生徒への影響など、項目立てれば、研究すべき課題が、近年、山積してます。授業でのタブレット使用が学力向上に、知的発達に寄与しているのか、阻害しているのか。◆平然とグーグルに頼り切って授業を勧めていますが、楽で良いけど、良いのか否か、わかりません。◆生徒はきちんと濃くはつきりと文字を書けないようになってきている、気がします。高校になると本の読む量が減るのはSNSやゲームのせいなのか、クラブやバイトで多忙なのか、検証されているような気がします。◆ゲームで男の子たちが群れているのに、違和感を感じています。前任校ではなかったのに、これが、時代性なのか地域性なのか、学校の特色なのか、どんなものでしょうか。◆Siriが女の子の声なのに、初めて疑問を持ちました。タバコを吸ってネットに上げるのは、何のためでしょうか。単にイイねがほしいのからでしょうか。◆流行語の歴史・流れからわかりやすく解説して頂き、コミュニケーションの方法や個人情報と社会との関係などについて、激変のありさまを振り返ることができました。営利優先の社会で、まず大人自身がスマホ浸け、子どもにも高価なおもちゃとして与えてしまう流れにのみ込まれて、途方に暮れるばかりですが、SNS利用から起こる「害悪を少しでも減らすため」に研究をしておられるという田中先生のお言葉が印象に残りました。◆生徒（表面的に見たり聞いたりするのは圧倒的に女子が多いです）の推し活について、コメントお聞きしたかったです。◆講演、良かったです。質問者の男性の発言を聞いて、AIやお掃除ロボットに女性性が割り当てられるのは普通という感覚に驚いてしまいました。料理を運ぶ、お掃除をする、ケアをするロボットは女性というところに、ケア労働をするのは女性というジェンダー観が刷り込まれていることを講師は指摘したと思うのですが。ロボット開発者や、AI研究者がそもそも圧倒的に男性だからそこに気が付かないのも、なるほどな5でした。ジェンダー意識に先進的な海外ではそう

でないことに少し希望が持てました。いかにジェンダー規範が内在化されてしまっているのかと、ちょっと絶望ではないですが、そこからか・・・と、いかに根深いかを感じました。ジェンダーは男性研究者が語ると、男性教員も理解が進むのかしらと？どうしたら、と考え中です。◆考えたことのなかった視点のお話で思考が整理されていないのですが、AIと言っても人間が作ったものであるので、たとえばAI音声アシスタントの声が女性だったりなど、開発者のジェンダーバイアスがかかる（たぶん無意識だと思います）ものだと思います。一方では急激に進化し、一方では依然意識が変わらないままのちぐはぐな状態なのだと思います。今日は、ご講演ありがとうございました。あらためて考えを整理していこうと思います。